



おとがわ



ふお～ゆ～

校長室だより

第 53 号

R4.3.11

文責 中西 勉



【4年】凛々しい姿が見られた「1/2成人式」

今週 8 日 (火) に、4 年生が「1/2成人式」を行いました。式に臨む子供たちの姿勢が大変素晴らしく、10歳を迎えられたことに対する喜びと感謝の気持ちや、今後、自分の夢や目標に向かい、立派な大人になろうとする志が伝わってきました。厳粛な式の後には、実行委員によるクイズ大会やサプライズで保護者からの手紙のプレゼントも行われ、充実したひと時を過ごすことができました。

※来る4月1日に民法が改正され、146年ぶりに大人の定義が「20歳」から「18歳」に変わります。その関係で、4年生が「20歳の1/2」のタイミングでこの式を行うのは最後ですね。



▲「1/2成人証書」を授与される代表児童



「東日本大震災」から11年 ～ある中学校の卒業式の答辞に学ぶ～

今日3月11日は、「東日本大震災」からちょうど11年となる節目の日です。現在小学生の子供たちは、高学年の児童であっても生まれたばかりの出来事だったので、この震災の記憶はないでしょう。しかし、日本で暮らす私たちにとって、この震災のことは決して忘れてはなりません。

そこで、今週7日の月曜集会で、宮城県のある中学校の卒業式(予定より10日遅れで、震災の年の3月22日に挙行)で読み上げられた答辞を紹介し、震災に直面してもしっかりと前を向き、懸命に生きていこうとする生徒の姿から多くのことを学びました。平成22年度『文部科学白書』に全文が掲載されたこの答辞を保護者の皆様にも読んでいただき、お子さんと感想を交わしていただくと幸いです。

本日は未曾有の大震災の傷も癒えないさなか、私たちのために卒業式を挙げていただき、ありがとうございます。ちょうど十日前の三月十二日。春を思わせる暖かな日でした。私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を、希望に胸を膨らませ、通い慣れたこの学舎を、五十七名揃って巣立つはずでした。

前日の十一日。一早早く渡された思い出のたくさん詰まったアルバムを開き、十数時間後の卒業式に思いを馳せた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こるとも知らずに…。

階上中学校といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし、自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。つらくて、悔しくてたまりません。

時計の針は十四時四十六分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされた者として、顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。

命の重さを知るには大きすぎる代償でした。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。

私たちは今、それぞれの新しい人生の一步を踏み出します。どこにいても、何をしようとも、この地で、仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。

後輩の皆さん、階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が、いかに貴重なものかを考え、いとおしんで過ごしてください。先生方、親身のご指導、ありがとうございました。先生方が、いかに私たちを思ってくださっていたか、今になってよく分かります。地域の皆さん、これまで様々なご支援をいただき、ありがとうございました。これからもよろしくお願いたします。

お父さん、お母さん、家族の皆さん、これから私たちが歩いていく姿を見守ってください。必ず、よき社会人になります。私は、この階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。

最後に、本当に、本当に、ありがとうございました。